

# 鯉老いて真中を行く秋の暮

藤田湘子

どこかの御苑や大寺の池であろうか。広々とした池の真ん中を、背びれを見せながら雄々と向こうへ進んでゆく黒く大きな鯉を見たのである。しかし、大きさや背面の無数の傷の具合から考え、此の池の主、あるいは群れを離れた老鯉と観たのかも知れない。

湘子五十五歳。壮年期を過ぎ、中年後期、そろそろ還暦の老いを意識し始めた頃。先を行く者の背中も見え、自分の背中、歷程も気になりだしたのではなからうか。

此道や行く人なしに秋の暮 芭蕉

されど、まだまだ芭蕉のようにには悟れない。まだやり残した俳句への思いがいくつもある。人生の秋とは、収穫期でもあり、その成果を問われる年代でもあった。